



Hiroshima City University Language Center

広島市立大学語学センター

Newsletter No.33 (2009.2.16)



留学生から見た語学センター

ルーマニアからの留学生が語る！自習室の魅力！

語学センター自習室は、C A L L 授業の受講、レポート作成、D V D 鑑賞など、毎日勉学に励む学生で賑わっています。そんな中、最近では留学生の自習室利用も増えてきています。そこで、留学生の代表として、ルーマニアからの留学生であるマラヌ・アンドレイア・ディアナさん（国際学部 研究生）に、語学センターでの様子や市大での留学生活についてメッセージをいただきました。

～ディアナさんからのメッセージ～



Hello everyone,

My name is Diana, I'm from Romania and I've been studying for the past eight months at HCU(Hiroshima City University) as a research student in the International Studies department. Just a few words to place myself in the context of a great journey that started a year and a half ago called Japan.



ディアナさん

Before coming to HCU, I was attending Hiroshima University where I lived and studied for five months. It was highly international and there were many foreign students. Then I came to HCU, here I didn't know anyone besides my teacher. I had the feeling of a new beginning but at the same time I felt sort of lost. But then I was introduced to all these great and friendly people and to the nice places in the university. One of my personal favorites is the Language Center. Nice friendly people, special thanks to the staff of the Language Center who have always been very helpful and kind in providing me with whatever information or material needed, a PC with internet connection for everyone, foreign and bilingual magazines and publications, but the thing that caught my attention the most was the movies. For me, watching movies at a university, especially during class hours, brings back many nice memories. I've studied Japanese cinema at the INALCO Institute in Paris, France for six months when I was 22 years old. I like watching movies very much, and especially Japanese and French movies are my passion. Now I find myself spending most of my time in the Language Center, doing my work, reading Newsweek magazine or watching a movie. It's my oasis, a nice friendly place where I can meet people that I can relate to and do the things I like. I've made friends here. Students that I meet here now often approach me in the cafeteria, join me for lunch or we chat in the hallway, offer to help me with my studies in the library or even invite me for a coffee in the city. I'm really grateful for it all.

I truly believe that whatever experience we have in our lives, good or bad, we should turn it around to make the most of it. Japan can be an overwhelming experience for one to handle especially when they are in their 20s like me. But it is indeed all the above and more: enriching and character building. Therefore I know that when I'll go back home, I'll become a better person.

Thank you!

目次：

留学生から見た語学センター	1
国際学部研究生 ディアナさん	1
デジタル変換のススメ	2
ミニコラム：	
国際学部 ミハイロバ先生	2
ヒロシマ人宛書簡	3
語学センター機器更新、 課外インテンシブ、映画上映会	4

アナログ⇒デジタル変換、のススメ

語学教材の音声・映像メディアがCD・DVD標準になって久しく、昨今では一般にブルーレイも普及しつつあります。平成21・22年度の語学センター機器更新の検討では、新規メディアへの対応を見据えつつも、今後のアナログメディア再生機材の製造中止・入手困難を見込み、その確保にも気を配っています。先生方が所有されてい

る教材の中にはアナログメディアのものもまだ多数あるかと思われますが、再生機器の消滅やメディアの劣化によって貴重な資料の使用が困難になる前に、特にビデオカメラ撮影されたDVやHi8等は、早目にデジタル変換されることをおすすめいたします。



ミニコラム 外国語に想う【28】

国際学部
教授 ミハイロバ、ユリア



What does the word “ナショナル” mean for the Japanese?

It is now a common wisdom that one cannot master a foreign language successfully without the adequate knowledge of culture. But I am not sure to which extent we are aware that writing systems of different languages and mentalities hidden behind them are important for mastering foreign languages too. In western languages words consist of letters, becoming thus a kind of mental concepts. In Japanese (and, of course, in Chinese) words include characters which are basically pictures. This makes meanings of words “visible”, hence more concrete. It is as if the Japanese and Chinese are thinking through images. This implies that it may be difficult for them to find adequate translation of abstract western concepts – certain images are associated with them.

In the Meiji period, when Japanese intellectuals began translating in earnest western political terminology, they spared no effort for choosing proper characters. One of the well-known examples is translations of the terms “freedom” and “liberty”. When written in characters, they could acquire negative connotations, contrary to their original western meanings. That is why a famous liberal of the time, Nakae Chomin, even preferred to explain these notions through the resort to Confucian terminology. Chinese philosophers added authority to his translations.

Nowadays a short-cut has been found in using *katakana*, but this does not mean that the Japanese really understand the meaning of a word written in *katakana*. It is easy to understand プリンター or コンピュータ, because one sees them in reality, but what about such word as “ナショナル”, for example? Does this mean “National Panasonic”, or “ナショナル” stands for state (国家) or for people (国民)? *Katakana* seems convenient, but it makes the meaning of words ambiguous.

The difference in languages based on letters and those based on characters may be reflected in methods of learning foreign languages. Until recently the Japanese used to begin the learning process from reading and writing. Now conversation is not neglected and is introduced from the very beginning. However, it seems difficult for the majority of the Japanese to master it. This may be attributed to the age longed practice of understanding words visually through their representation in images.

ヒロシマ人宛書簡③

非被爆者で余所者（よそもの）だけど

Iさん、また『原爆詩一八一人集』(コールサック社07年8月)をはじめから読みなおしています。この本は1945年から59年までをはじめに、10年単位の編年でふりかえる「原爆詩」のアンソロジー。2000年代の量が多い(目次で5頁にわたる)のは「過去」の詩のみでなく出版の「呼びかけに呼応し新たに原爆に対峙して」現役の人が書いた新作を含むから。裏読みすれば、そもそもしないと詩集、しかも原爆が主題の詩集が売れない時代になっているというべきか。2000年代の詩へのこの処置は出版の意義と赤字対策のための堅実、周到な配慮とも考えられます。なにしろ1974年の大原三八雄編『世界原爆詩集』以来33年ぶりの原爆詩集というのですから。

「33年ぶり」で思うのはこれからのこと。2045年、ヒロシマ・ナガサキ100周年、即ち原爆百回忌、その時は今の大学生、大学院生らがほどなく還暦をまじかにする頃、核兵器をめぐる状況はどうなっているのでしょうか。廃絶完了済か。

ヒロシマ某大学で
教官が中国の留学生達に質問した
<ヒロシマへの原爆投下をどう思うか>
と
意外や 学生達の間からどつと笑い声がわき起った
<何故 笑うか?>
きっとなって詰問した
<だって原爆のおかげで私達は解放されたんですよ>
と 有無を言わさぬ毅然たる返答であった
と 某紙コラムは報じた

以来、留学生の笑い声は作者の胸中に反響する(大崎二郎「笑い 三つ」00年代)。90年代にも「あの ヒロシマの原子キノコ雲の『映像』にさえ/アジアの人びとは 大きな拍手をしたという」(津田てるお「コーヒーはブラック」)がある。1976年の栗原貞子「ヒロシマというとき」が加害をめぐる認識のひとつの分水嶺にもなる(※)。被害者であるが同時に加害の側にいた。そのことによる痛みの自覚が足りなかった歴史的事実に僕

たちが直面し始めたのはやはり70年代からでしょう。唯一の被爆国が同時に加爆国になる道筋だけは僕たちは断固選ばずに生きてきたはず。

「僕は広島の旅人だけど」という題の詩(北畠隆)がある。「私はヒバクシャじゃあないんだけど」と最初に言つてから語り始める人もいる。「俺はヒロシマのよそものだけど」と前置きしてから喋べる人もいる。広島(廣島)のネイティブでなくても、心をこの地に寄せる各地の無数の人々。ヒロシマを記憶し表現する人はみなヒロシマ人だ。

「その微笑をまで憎悪しそうな 烈しさで」。「正義とは/つるぎをぬくことではない」。「スイソ原子とサンソ原子が ぶつかって 水が できた」。
「腕にふむのはまぼろしの腸」、「丘にそば立てるA

B C C こそ/屍の礎にそびえる阿修羅城。」「河には閉じぬ眼球洗われ」。「ギド・レニエの/荊冠のキリスト」。「犬の餌のようになったわたし」。「傘の人質」。「おれが目の前に佇つや、いきなり/背中一面の瘢痕を見せ/『ボクピカドン ノ 語り部』だと」。「つぎにくヒロシマの上に紙をおく 鉛筆でこする/ <衆目の視線にさらすことによって 今一度《なぶる》 そのことについて考えたことがありますか?>」。「ちりちりのラカン頭/全身の皮膚を垂れ下げた少女二体の蠍人形」。「戦争は/若葉のような兵隊がする」。「<爪>と表示されていたので/爪、とわかったものだった」。「即死の時計」。

Iさん、娘さんたちのいる東京へ転居してもう何年ですか。身近に詩人がいると詩の話ができる、これは大切なことです。収録のIさんの「もう四十年になるのですか/まだ捜しあてずに日が暮れます」(伊藤眞理子「たずねびと」冒頭2行)は原民喜「夏の花」の「実際、広島では誰かが絶えず、今でも人を捜し出そうとしてゐるのでした」(「廃墟から」最終2行)を引き受ける表現、と解釈したいが如何? 次、この文の(※)は正確な歴史認識だと同意してくれますか。たよれる我が姉さん役のIさんは立派なヒロシマ人。



芥川永《雲になった蛙》1975年、広島県立美術館蔵

来年度、後期から語学センターが変わります

語学センターフロア図



* 網掛け部分が来年度機器更新箇所

語学センターでは、来年度、夏期休暇中に機器更新が行われます。該当箇所はセンターの半分で、403 A教室、403 B教室、404 教室、共同研究室、スタジオ・編集室です。

来年度の機器更新では、教室機能に大きな変更は予定されていませんが、403 A教室・403 B教室の2教室間合同遠隔授業機能がより使い易くなる予定です。また、ブースなど、デザインの刷新を検討しています。

パソコンのOSは、現在のWindows XPからWindows VISTAに、Office系ソフトウェアはMicrosoft Office 2003からMicrosoft Office 2007になる予定です。センターの残り半分(408 教室、自習室、事務室)のパソコンは旧OS、旧Officeのままであるが、相互の互換性に大きな支障はない予想です。残り半分の機器更新は、平成22年度に予定されています。

平成21年度・22年度機器更新については、また来年度のニュースレターでより詳しくご報告する予定です。

春休み課外インテンシブ 開講

春休み期間中、語学センターで学生(学部学年不問)を対象に春休み課外インテンシブが、下記のとおり開講されます。

●期間: 3月2日(月)～3月27日(金)

●コース:

- ①リーディング・リスニング・文法プログラム
(場所: 語学センター自習室)
- ②スピーキング・ライティングプログラム
(場所: 語学センター408号室)

●受講条件: 毎日最低3時間以上学習すること

1年生(全学部)、2年生(芸術学部を除く)の必修科目であるCALL英語集中は、授業期間中の2ヶ月間のプログラムですが、課外インテンシブは、休暇期間中に文字通り英語を“インテンシブ”(徹底的)に鍛える、1ヶ月間のプログラムとなっています。問題量は2ヶ月間のものと変わらないので、2ヶ月分が1ヶ月分へと凝縮されたものになり、短期で学習してみたい人にはお勧めです。

TOEICのスコアを飛躍させたい人、スピーキング・ライティングのスキルをアップさせたい人、この機会に春休み課外インテンシブを受講してみてください。



映画上映会報告

12/8～12/19に、第4回目となる語学センター映画上映会を開催しました。

今年度のテーマは「世界の映画2～カルチャーショックシネマ」でした。2つ以上の国や文化にまたがる内容の映画を取り上げ、12/12には国際学部のミハイロバ教授が解説のためにご参加くださいました。

参加者の感想文には、「異文化コミュニケーションのいい教材ですね」という言葉もあり、映画を通して異文化を感じることができたようです。映画鑑賞は異文化を体験できる身近な手段ですね。語学センターには今年度上映した映画DVDが置いてあります。視聴を希望する人は、気軽に自習室カウンターで尋ねてください。

今年度は教職員の方々にも多数ご参加いただけて良かったですが、来年度は、より多くの学生の皆さんに参加してもらえるように、CALL英語集中プログラムやレポートなどで多忙になる時期を避けて開催できればと思います。語学センターインフォメーションボードや掲示板などでお知らせするので、情報に注意してください。

*語学センター学生用HPのトップページ、右下の「Special Feature パックナンバー」から、上映作品や上映会レポートを見るることができます。



視察報告

- 9/10 大阪樟蔭大学 2名
- 9/25 進路指導説明会 11名
- 10/6 米子西高校教員 2名
- 10/9 祇園北高校PTA 38名
- 10/17 安芸府中高校PTA 13名
- 10/23 呉高校 45名
- 10/29 福山短期大学 5名
- 11/21 口田文化教室 38名



進路指導教員対象説明会
国際学部渡辺准教授
によるデモ風景

発行日

2009年2月16日

発行

広島市立大学語学センター

〒731-3194

広島市安佐南区大塚東3-4-1

編集

堀本真由美

伊達美和子(内線: 6410)

Phone

(082) 830-1509

Fax

(082) 830-1794

E-mail

lang@intl.hiroshima-cu.ac.jp

ホームページ

[http://call.lang.hiroshima-cu.ac.jp/
lang/index.html](http://call.lang.hiroshima-cu.ac.jp/lang/index.html)

